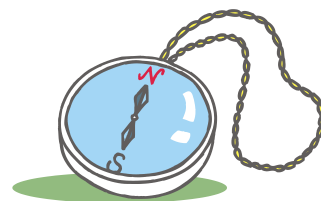


羅 針 盤

第 8 号

令和3年（2021年）5月31日（月）



◆ 玉琢かざれば器を成さず

時がたつのは本当に早いもので、気がついてみれば1学期もすでに半ばを通り越して、折り返し地点を過ぎ去っています。始業式の日には、『あ・ひ・る』人間になろう！を継続していきましょうとお話しました。挨拶ができる人になること、人の話を素直に聴くことができる人になること、そして、ルール（約束ごと）を守ることができる人になること、これらのことは、お互いに気持ちよく学校生活を過ごしていくうえで、できていて当たり前のことであるとも言えます。「当たり前のことが、当たり前にできるようになっている」ということ。これらのことを踏まえて、「志（こころざし）を高くもつ」ことや「挑戦し続ける気持ちを持つこと」の本当の意味に気づくことが大切なことです。2008年に、益川敏英（ますかわとしひで）、南部陽一郎（なんぶよういちろう）と共にノーベル物理学賞を受賞され、物理学者として有名であり、高エネルギー加速器研究機構の特別荣誉教授を務められた小林誠（こばやし まこと）さんは、「ノーベル賞をとるような研究は、何かの偶然、巡り合わせでなされることが多い。可能性をみんな秘めているわけで、潜在的な可能性に挑戦し続けることが大事なことです。」と語っておられます。このことは、生徒の皆さん一人ひとりにも同じであって、誰もが可能性を秘めており、やればできるということを教えてくれています。中国の「史記」という書物に、「玉（たま）琢（みが）かざれば器（うつわ）を成（な）さず、人（ひと）学ばざれば道（みち）を知らず」という言葉があります。つまり、宝石でも磨かずに原石のままにしておいたら、真に価値のある物にはならない。それと同様に、人も生まれた後に然るべき学習をしなければ、人間としての正しい生き方を知ることはできないという意味です。「志を高くもち、挑戦し続けることで、」目標や夢に向かっていく自分自身を磨くことができ、その姿勢が何よりも大事なことです。コロナ禍の影響により制約された中での学校生活が進んでいきますが、目標を見失うことなく、健康にも十分留意しながら、有意義な学校生活を過ごしてくれることを強く望んでいます。

◆ 「おもう」から「考える」へ

哲学者である池田晶子（いけだあきこ）は著書『14歳からの哲学』の中で、「おもう」という営みの力を投げかけていますが、「思う」や「想う」だけでなく、記憶がよみがえるように「憶う」、心に秘めた人を「恋う」、大切な人の無事を「念う」、幼い頃のことを懐かしく「懐う」、あるいは忖度の「忖」、遠慮の「慮」、回顧の「顧」もそれぞれ「おもう」と読みます。「おもう」という言葉にはたくさんの側面があるようです。池田晶子さんは、「おもう」は「不思議な感じ」のでてくるところ」だとしていて、自分の中にある「不思議な感じ」を体感することであり、「おもう」ことから始まり「考える」ことにつながっていくとしています。そして、「考える」とは、自己に深く入っていくと同時に、限りなく他者から聞かれるという営みであるとしています。「自己の変化」と「他者とのつながり」、この二つが始まることによって、「考える」ことが深まっていくと彼女は捉えているようです。「おもう」だけでなく「考える」ことの意義を感じとってほしいものです。

